

Le petit Nicolas における不定代名詞 *on* の使用状況

松本 潮美

1. はじめに

代名詞 *on* は、一般的に人称代名詞と呼ばれる *je* や *tu* などとは異なる特殊なもので、発話状況によって解釈が変化する不定代名詞である。朝倉は『新フランス文法事典』(2002)において、「*on* は文脈・状況により、すべての主語人称代名詞に変わることができ、他の語との結合関係は主語人称代名詞とまったく同じで、非人称ではない *il* を用いた文ではいつも *il* を *on* に置き換えることができる」(pp.344-345)としている。つまり、*on* はさまざまな人称の要素を含んでおり、文中に現れる一つ一つの *on* が指し示す意味を解釈するためにはコンテキストを正しく理解する必要がある。特に言語習得期の子どもや、フランス語学習者にとって、*on* の持つ複雑なシステムを理解することは大変困難である。本稿ではフランスの子ども達に長きに渡り親しまれ、日本においてもフランス語初中級学習者によって *Le Petit Prince* と同じように親しまれている *Le petit Nicolas* をコーパスとし、フランスの児童文学における *on* の使用状況を考察していく。

2. *Le petit Nicolas*

本稿で扱う *Le petit Nicolas* は 1960 年に出版された児童向けの短編小説で、René Goscinny が物語を、Jean-Jacques Sempé がイラストを担当している。全14巻222話がIMVA出版、そしてGallimard社のFolio Juniorから出版され、フランスにおける年間売り上げは全シリーズ合わせて30万部を突破するベストセラーである。フランス文部省により推薦図書にも指定され、多数の小学生が *Le petit Nicolas* で物語の読み方を学んでいる。世界的には全45の国々で翻訳され、売り上げは全タイトルで計1500万部。¹日本でも翻訳版が発売されている。そしてフランス語の原書は *Le Petit Prince* のように初中級フランス語学習者のフランス語学習手段の一つとしても親しまれている。

物語は、小学生のニコラの生活を中心に展開され、1960年代の小学生の学校生活や家族とのやりとりが面白おかしく描かれている。児童文学は「作中人物に共感が抱けるかどうか、作品を左右する」(久米、1987)といえる。この物語の場合も語り手は主人公ニコラであり、子どもが「日記帳に向かってしゃべり続けているような話しことばの文体」(久米、1987)で物語が進むため、読むことを練習し始めたばかりの子どもたちにとっても親しみやすく、共感しやすい内容となっている。

前述の通り、*on* はさまざまな人称の要素を含む代名詞である。物語の語り手が主人公に委ねられることの多い児童文学において、その代名詞 *on* が主人公の少年によっていかに使用されているのか、*Le petit Nicolas* を通して本論文では分析をしていく。

3. *On* の意味

『新フランス文法事典』(朝倉、2002)によると、*on* の意味は以下のように分類される。

II. *on* の意味

1° 不特定の *on*

① 人間一般

¹ *Le petit Nicolas* 公式ホームページより <http://www.petitnicolas.com>

② 不特定の一人または数人

2° 文体的用法

① on=je, nous

- (1) 謙遜
- (2) 尊大

② on=tu, vous

- (1) 馴れ馴れしいtu も、よそよそしいvous も使いにくい場合
- (2) 語気緩和
- (3) 親愛
- (4) 皮肉
- (5) 軽蔑

③ on=il(s), elle(s)

- (1) on といえば誰のことかわかると話し手が考える場合
- (2) 名前を出すことを憚って

3° on=je, nous

文体的価値を失い、話し言葉では単に je, nous の代用

(pp.344-345)

このように、on の用法は多義的である。on が一人称や二人称の単数形・複数形の意味を含む代名詞であるとするれば、je や tu, nous や vous のような会話状況にある対話者を指す、一・二人称の人称代名詞の一つとして分類することができる。だが、on は動詞を活用する際、三人称単数の形を用いる。この点から、代名詞 on は三人称単数に近いものだとも言える。また、バンヴェニストは『一般言語学の諸問題』の中で、二人称が非人称に変わることがあり、「フランス語では vous が on の承前詞として機能する」ことや、「多くの言語で、君 (あなた) が on の代用語として用いられる」ことなど、on とシフターである人称代名詞との関連性を指摘している。(p.221) しかし、同じく不定代名詞に分類されている quelqu'un, chacun, personne, rien と on は異なるものであることを小田(2016)は指摘している。なぜなら、on 以外の不定代名詞が「主格や対格、属格としてさまざまな位置に生じうるのとは異なり、on には主格としてしか用いられない統語制約」があり、on は「動詞の直後に on を置く接語倒置の疑問文を作るが、一般に不定代名詞は (中略) 人稱代名詞で受け直す複合倒置の疑問文にしなければならない」からだ。このように、on は不定代名詞ではあるものの、「人稱代名詞の主格形に近い統語的性質を持っている」のである。(p2)

本稿では、*Le petit Nicolas* に収録されている短編 19 話の本文中に登場する代名詞 on、計 349 個を以下のように分類した。

- 1) 不特定の on (人間一般「人、人びと」/不特定の一人、または数人「だれか」)
- 2) 特定のものを不特定として表す文法的用法 (on=je, nous, tu, vous, il(s), elle(s))
- 3) on=je, nous (単に je, nous の代用)

以上の項目を元に、次章より分析を行なう。

3.1. 不特定の on (人間一般「人、人びと」/不特定の一人、または数人「だれか」)

「不特定の on」とは不特定の人間を表すものであり、そのタイプは①人間一般「人、人びと」②不特定の一人、または数人「だれか」を指し示す二つのタイプに分けられる。

一つ目のタイプで指し示される「人間一般」とはフランス語でいう *les hommes en général, l'homme* であり、用例としては(1)のようなものが挙げられる。

(1) *On est tous comme ça.* 「人間はみんなそんななんだ」 (VIAN, Pékin, 163)

二つ目の「不特定の一人、または数人」とは、季節や月・曜日・日付などを表すときや、動作主を「だれか」として設定せず曖昧にしながら相手を嗜めるときなど、文を一般化し共感を求めたいときなどに使われる。また、動作主を表現しない受動態に代わって用いられる場合もある。

Le petit Nicolas において、この「不特定の on」は計 22 例見受けられた。そのうち 13 例が「人間一般」、9 例が「不特定の一人、または数人」を表す on であった。

① 人間一般「人、人びと」

このタイプに属する例文はわずか 13 例しかないが、「すべての人間」を指し示した on、そして「限定された集団に属する人びと」を表す on の 2 つのタイプが見られた。例文(2)は「すべての人間」を示す際に使われる on である。

(2) « *Tu es un voleur de chevaux, il a dit à Eudes, et à Kansas City, les voleurs de chevaux, on les pend !* » (p.18)

「おまえは馬どろぼうだ」と、ユードにむかっていった。

「カンサスシティでは、馬どろぼうはしばり首にすることになるとる。」 (p.25)

(2)の文章は子供同士の会話である。「カンサスシティでは、馬どろぼうをしばり首にする」という周知の事実があるということ、本で読むか大人から聞くかしたのであろう。ルフュスは友人に向かって、一般性を表す on を用いてそのことを説明している。

Le petit Nicolas では、このように人々が持つ「周知の事実」や「常識」を表す際に用いられる on が 5 例ほど見られた。例えば、転校生に対して彼の国での常識を問う、

(3) « *Qu'est-ce qu'on fait comme sport dans ton pays ?* » a demandé Eudes. (p.61)

「きみの国では、スポーツはなにをするんだい」と、ユードが聞いた。 (p.86)

という (3)や、ニコラの父親がニコラに学者パスツールについて説明をする(4)の文章などで用いられている。

(4) (...) *Pasteur a inventé un médicament, c'est un bienfaiteur de l'humanité et on peut guérir, mais ça fait très mal.* (p.52)

(...)パスツールがお薬を発明したんだ。彼は人類の恩人だよ、この薬で助かるんだが、注射はとても痛いんだよ、とぼくにいった。 (pp.73-74)

もう一つの特徴は、邦訳文において「みんな」と訳される、限定された集団を表す on である。語り手であるニコラを含めた全ての人間「みんな」(=*tout le monde*)であったり、話し手であるニコラを含まないその他の「みんな」を指し示している場合もあったりするが、その構成要素は不特定である。話し手または物語の語り手の主観や世界観に基づいて一般論を述べるために on が用いられている。このタイプは本文中で

8例見つかった。

(5)は、写真を撮影するのにもかかわらず、その直前にジャムを零してしまったアルセストという少年に対して先生が言ったセリフである。

(5) La maîtresse a dit qu'il n'y avait plus qu'une chose à faire, c'était de mettre Alceste au dernier rang pour qu'on ne voie pas la tache sur sa chemise. (p.11)

先生は、これではもうしかたありません、シャツのしみが見えないように、アルセストはいちばんうしろの列へやります、といわれた。(p.17)

この on は、アルセストを一番後ろの列へ配置することで、その場にいる子供たちや写真屋さんのみならず、「写真を見る誰にも」＝「みんなに」ジャムの染みのついシャツを見せないようにしようという意図があると思われる。

(6)は、友人に嘘をつかれて濡れ衣を着せられ、生徒監のブイヨンに罰を与えられそうになったニコラの必死の抵抗である。

(6) Alors je me suis mis à pleurer, j'ai dit que ce n'était pas juste et que je quitterais l'école et qu'on me regretterait bien. (p.28)

そこでぼくは泣き出して、こんなぬれぎぬはひどい、だったら学校をやめてやる、ぼくがいなくなったら、みんな寂しい気持ちになるぞ、といった。(p.43)

On の直後にある me からわかるように、この on にニコラ自身は含まれていない。そのため、この on は nous の代用としての on ではなく、クラスの友人を含んだすべての「みんな」がニコラが学校をやめることによって悲しむということを表していると考えられる。

② 不特定の一人、または数人＝「だれか」

次に、「不特定の一人、または数人を指し示す on」を取り扱いたいと思う。ここでは前後の文脈から確実に「話し手または語り手が行為主体を定められない場合、または行為主体を定めることができるが明らかにしたくない場合」＝「だれか」を表していると考えられる例文だけを集めた。その結果、(7)～(9)を含む9例がこれに該当すると結論付けた。

(7) Maman l'a regardé et puis et puis elle s'est baissée et elle a caressé la tête de Rex et Rex lui a léché la main et on a sonné à la porte du jardin. (p.54)

ママはレックスをじっと見てから、かがみこんでレックスの首をなでると、レックスはママの手をなめた。すると、だれかが庭の門のベルをならした。(p.79)

(7)は、ニコラの拾った犬レックスを、本当の飼い主が迎えに来た場面である。庭の門のベルを鳴らしたのは本当の飼い主なのだが、ベルが鳴らされた時点では不特定の人物として on を用いて描かれている。

«On a bien rigolé» (『さぼってみたけど』) に登場する(8)の文章も、不特定の「誰か」を表す on である。

(8) Mais là, il ne mangeait pas, il avait la main dans la poche et, pendant que nous marchions dans la rue, il regardait derrière lui comme pour voir si *on* ne nous suivait pas. (p.94)

けれども、そのときは何も食べていなかった。片っぽの手をポケットにいれて、ぼくらが街を歩いているあいだじゅう、だれかにつけられていないかとたしかめるみたいに、うしろをふりむいていた。(p.137)

(9) C'est une grosse boule en métal, sur laquelle *on* a peint des mers et des terres. (p.138)

これは金属のできた大きい球で、その表面に海や大陸などがかきこんである。(p.197)

(9)は、ニコラの友人であるアニヤンの家にあった地球儀を説明しているものである。金属のできた大きな球に海や大陸を書き込んだのは誰だかわからないが、不自然な受動態の使用を回避するために、あえて *on* を使って能動態の文にしたと思われる。

(7)~(9)のように、*on* を「だれか」の意味で用いることによって、行為主体ではなく行為そのものに焦点を置くことが可能である。(7)の場合はベルを鳴らした「人物」ではなくベルを鳴らしたという「行為」が、(8)(9)の場合も重要なのは行為をした人物ではなく「行為そのもの」なのである。このように、*on* をつかうことによって、行為主体が行為の裏側に退くことを小田(2016)は「行為主体の希薄化」と呼んでいる。*On* の代わりに「人びと」を表す *les hommes* や *quelqu'un* を使っても行為主体は希薄化・背景化されない。邦訳文においても、あえて「人は」と訳すことは原文の意味を歪めてしまうこととなる。

3.2. 特定のものを不特定として表す文体的用法

代名詞 *on* は文脈・状況によっては、*je*、*nous* 以外にも、*tu* や *vous*、*il* (s)、*elle* (s) と置き換わることができる。しかし、*Le petit Nicolas* の中に出てきた「特定のものを不特定として表す文法的用法」は、*il* (s) または *elle* (s) の代用だけであった。それも、*on* といえど誰のことを指しているかわかるとニコラが考えているであろう文脈でしか使われていない。この例はコーパス内に5例見つかった。例えば、(10)の *on* は「先生たち」= *ils* を指している。

(10) *On* nous a fait tous descendre dans la cour et le directeur est venu nous parler. (p.88)

ぼくらはみんな校庭に集められた。そして校長先生がこられて話をされた。(p.128)

« *On* a répété pour le ministre » (『大臣閣下を歓迎するには』) の冒頭に出てくる文章のため、*on* が誰を指しているか前の文脈から判断することは不可能である。しかし、ニコラたち生徒を表す *nous* がその直後にあることから *on* ≠ 生徒であること、その生徒を校庭に集めることができるのは「教師」であることから、この *on* が教師を表していることを予想するのは容易であるし、話し手であるニコラもそれを承知していると思われる。

ニコラが *on* を使って特定のものを不特定として表す場合、その対象は先生などの学校関係者となる。これは、ニコラたち生徒に対して「先生」という対立が読者である子供たちにもわかりやすいからであろう。(11)も同様である。

(11) « Dommage que ce ne soit pas des filles, a dit le directeur, *on* pourrait les habiller en bleu, blanc et rouge, ou alors, ce qui se fait parfois, *on* leur let un nœud dans les cheveux, c'est du meilleur effet. » « Si *on* me met un nœud dans les

cheveux, ça va fumer », a dit Eudes. (pp.90-92)

「女の子でなくてざんねんだが、この子たちに、青、白、赤の衣装を着せたらどうかな、それとも、場合によっては、三色のリボンを髪につけさせよう。そうすれば効果はばつぐんだ。」

「ぼくの髪にリボンをつけたら、ひとあはれだぜ」と、ユードがいった。(p.131)

ここでは、一人の生徒と対立する形で「先生」=ils を意味する on がつかわれている。一文目の校長先生が自ら教師陣をまとめて on としているところから、引っ張られるようにユードは on を使って教師陣と自らの対立を表したのではないかと考えられる。以上の例のように、子供が語り手である児童文学において on が特定の人物を不特定の人物として表す場合、子供にとって身近で、誰を指しているかわかりやすい人物を表すことが多いといえることができる。

3.3. on=je, nous (単に je nous の代用)

一人称複数を表す nous が不定代名詞 on に置き換えられることは、この作品が書かれた 1960 年代から口語的な表現の中ではよくある話であった。しかし、nous を on で置き換える表現の仕方はまだまだ完全に認められたものではなく、口語表現に限られた流動的でもあった。少し遡った 1940 年代には、on による nous の置き換えが「通俗的な表現」とされていたが、「Ce sont surtout les gens assez jeunes qui reprennent volontiers nous par on」(H.Tjemeld, 1947, p.38)と分析する研究者もおり、1960 年代には on を nous の意味で使用することが、ある程度社会に浸透していたのではないかと推測することも可能である。

Le petit Nicolas に登場する on には、nous を on に置き換えるこの用法が一番突出して確認され、計 322 例がこれに該当した。特に on=nous=Nicolas+誰か、またセリフの発話者である人物+その他の人物を指すために使われているものが多かった。(なお、je に置き換えたものは一つもなかった。)

(12) *On* gagné par 44 à 32. (p.66)

44 対 32 で、ぼくらが勝った。(p.95)

(13) « Bon, *on* y va ? » a crié Alceste. (p.34)

「さあ、はじめようぜ」と、アルセストがさげんだ。(p.50)

(14) « C'est vrai, a dit Rufus, c'est pas chouette ce que vous avez fait aux fleurs de Nicolas ! – Toi, *on* ne t'a pas sonné ! » a répondu Geoffroy et ils ont commencé à se donner des gifles. (p.69)

「そうだと」とリュフユスがいった。「きみらがニコラの花でやったことは、よくないぞ。」「なんだと、おまえの知ったことか」とジョフロワがいれかえし、ふたりはなぐりあいをはじめた。(pp.100-101)

(12)(13)(14)のように文中に nous の代用として登場する on は計 322 例確認されている。それに対して、主語として使われている nous の数が 98 個と圧倒的に少ないのも注目すべき点である。これは on の持つ親近性が影響しているのではないと思われる。小田(2016)が「話し手は nous が含意する行為の主体を他の人称が表す主体から区別して意識し、文の表す出来事・事行を、その出来事・事行の外側から述べている。一方、人称間の対立の中和と行為主体の希薄化の作用を持つ on は、誰が行為主体なのか明確に意識させることはなく、話し手は文を表す出来事・事行のただなかにも身をおいて、内側から出来事・事行を描写する」

(p.30)と述べているように、あえて物語の語り手であるニコラに *on* を使わせて行為主体を希薄化することで、読者は彼と一体となって物語を捉えることができる。そのことが、物語を読む練習を始めたばかりの読者と登場人物の間に親近性を生み出していると推測することが可能である。

加えて、三人称単数の動詞活用形を用いる *on* は、特殊に変化する *nous* の活用形に比べて子供達にとって読みやすいということもこの原因としてあげられる。Damourette et Pichon (1943)では、「*Cette substitution de on à nous comme adminicle locutif pluriel est très fréquente dans la bouche des enfants et, dans beaucoup de familles de la classe cultivée, les parents ont à lutter contre elle par l'éducation.*」(p.2345)と指摘され、この「*nous* を *on* に置き換える風潮」がこの時代の子供たちの中で頻繁に使われていたことをうかがい知ることができる。

(15)のように、一つの文章の中に *nous* を主語とした文と *on* を主語とした文が共存している文章もコーパス内で多々見受けられる。

(15) *Nous* avons attaché papa à l'arbre avec la corde à linge et à peine *on* avait fini, que *nous* avons vu monsieur Blédurt sauter par-dessus la haie du jardin. (p.20)

ぼくらはパパを、ロープで庭の木にくくりつけた。やっとうまくしぼりあげたときに、ブレデュールさんが庭の生垣をとびこえてくるのが見えた。(p.29)

一人称複数を表す *on* の使用と *nous* の共存関係で興味深いのが、(16)で示されている「*nous, on*」のような、*nous* と *on* が並んで使われている例である。今回使用したコーパスの中でも27例確認された。

(16) *Nous, on* fait comme il avait dit, le directeur, et *on* lui a donné les plumeaux. (p.93)

ぼくらは、校長先生のいわれるとおりにして羽根ぼうきをわたすと、校長先生は羽根箒をうけとったあと、突然怒り出した。(p.123)

(17)のように、*Nous* と *on* の間に「,」を打っていないケースもある。

(17) *Nous on* était drôlement contents ! (p.20)

ぼくらは、とてもごきげんになった。(p.29)

この「*nous, on fait*」は「*moi, je fais*」、「*toi, tu fais*」と同じ文構造である。勿論、*nous* を使って「*Nous, nous faisons*」とすることも可能だ。しかし、あえて強勢形代名詞 (*le pronom tonique*) と接語代名詞 (*le pronom atone*) が同じ「*nous, nous*」ではなく、異なる「*nous, on*」を使用することに対して、Csécsy (1968) は次のように述べている。

«*Nous, on parle*» rappelle les couples «*moi, je parle*», «*toi, tu parles*», etc, et est certainement plus expressif que «*nous, nous parlons*». » (pp.34-35)

また、「*nous, on*」を使用することによって、文をより「表現的」にするのみならず、より「明快」にするということを指摘している研究者もいる (Gradström 1969) 確かに、(18)のような再帰動詞を使用した文章の場合は特に、*on* に置き換えることで文章がより分かりやすくなる。

(18) *Nous, on s'est dit que ce n'était pas plus le moment de faire les guignols, parce que le surveillant, quand il n'est pas content, il donne de drôle de punitions.* (p.28)

ぼくらは、もうドタバタしている場合じゃないと思った。だってブイオンはきげんのわるいときは、ものすごい罰をくわせるんだ。(p.42)

(cf. *Nous, nous nous somme dits* (...))

再帰動詞の主語に *nous* ではなく、*on* を用いることに関して、多くの学者が「*nous* の繰り返しを避けるためだ」ということを指摘している (Nyrop, Frei, Sandfeld, Gradström)。同じ単語が繰り返し使われることを嫌うフランス語の風潮が、上に示した文章のような、主語としての *nous* と *on* を一文の中で併用することや、強勢形代名詞としての *nous* と主語としての *on* の併用、再起動詞の際に *on* を使用することにつながったのではないかと考えられる。

また、*nous* が *on* に置き換えられる現象の原因として、「一人称複数形の現在形と半過去形の活用の発音が類似している」ことも挙げられている。

« *Le fait que nous croyions, p.ex., se confonde facilement avec nous croyons dans la prononciation* (...). (*Nous*) *on* *croit* et (*nous*) *on* *croyait* indiquent clairement de quel temps il s'agit. » (Gradström 1967, p.293)

Le Petit Nicolas においても視学官の質問に子どもが答える際、*on* を主語とした半過去形の文章が登場している。

(19) « *Bien, il a dit, que faisiez-vous, avant que je n'arrive ? – On changeait le banc de place* », a répondu Cyrille. (p.44)

「よろしい、きみたちは、わたしがくるまえ、なにをしておったのかね」ときいた。

「机の位置をかえていました」とシリルがこたえた。(p.61)

(cf. « *Nous changions la banc de place.* »)

一人称複数形の現在と半過去形の活用が音声学的に類似しているからこそ、半過去形の文章を *on* で構築することが好まれたのではないかと、ここから考えることができる。

4. おわりに

分析の結果、*Le petit Nicolas* では一人称複数形代名詞 *nous* の意味を内包した *on* が特によく使われているということがわかった。不特定の人物を指し示す *on* や、三人称単数または複数に限って特定の人物を不特定として表す *on* の使用も見られた。対して、*on* の特徴でもある「不特定の *on*」が思ったよりも少なかった。そして、一般的に一人称複数 (= 私たち) を表す代名詞 *nous* の使用より、*on* の使用の方が多いこと、その理由として *on* の持つ「行為主体の希薄化」が挙げられること、*nous* の繰り返しをさけるために強勢形の *nous* が主語の *on* と併用して使われること、再起動詞の際に *on* を主語にすることがあること、そして現在形との混同を避けるために半過去を使う際 *nous* ではなく *on* を使う傾向があることもわかった。これは1900年以降に始まった *nous* を *on* に置き換えて表す言語の移り変わりの結果ということもできるであろう。

今後は、2010年代以降の児童向け作品において *on* がどのように使用されているか、1960年代からどのように変化していったかなどを調べることを課題として、本論を閉じたいと思う。

参考文献

René Goscinny et Jean Jaques Sempé (1973) : *Le petit Nicolas*, Gallimard

ルネ・ゴシニ (著) / ジャン＝ジャック・サンペ (イラスト)、曾根元吉・一羽昌子 (翻訳) (1996) : 『プチ・ニコラ 〈1〉 集まれ、わんぱく!』 偕成社

朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』 白水社

エミール・バンヴェニスト、岸本通夫 (監修・翻訳) (1983) : 『一般言語学の諸問題』 みすず書房

Sakagami, R. (2006) : « Que traduit-il le pronom français ON ? – autour de problèmes entre le français et le japonais – », 言語文化論叢 10, 金沢大学, pp.197-212.

川口順二 (2017) : 「文法的は何か? – フランス語不定代名詞 *on* をめぐって」 『フランス語学研究』 51, pp.125-131.

小田涼 (2016) : 「不定代名詞 *on* による行為主体の希薄化について」 春木仁孝・東郷雄二編 『フランス語学の最前線』 4, ひつじ書房, pp.1-45.

久米あつみ (1987) : 『フランス語文学の一側面 – 『プチ・ニコラ』の世界–』 東京女子大学附属比較文化研究所紀要, p.121-134

Grafström, A (1969) : « On remplaçant nous en français » *Revue de linguistique romane*, 33, p.270-298

Csécsey, M. (1968,) : « Personnes et nombre dans les formes orales du verbe », *Le français dans le monde*, 56, pp.31-35

Damourette, J., et Pichon, É. (1943) : *Des mots à la pensée, Essai de grammaire française*, t.VI, Édition d'Artrey

« *Le petit Nicolas* » オフィシャルサイト (仏) : <http://www.petitnicolas.com>

(まつもと しおみ / 文芸言語専攻1年)